

長崎県下におけるイヌマキ林

—主として材の利用について—

長崎県総合農林試験場 松尾俊彦

1. はじめに

イヌマキはスギと同様古くから日本人と深いかゝわりを持ってきた郷土樹種であり、その特性には興味深い点が多々みられる。しかしこれに関する研究は極めて少なく、長崎県でもこれまでは林業上の関心はほとんど持たれていなかった。たまたま昭和53年の風台風で、五島のヒノキ一斉単純林が大被害を受け、善後策を講ずる中から耐塩性のあるイヌマキが注目され、現在県内イヌマキ林の実態調査を開始した段階にある。

調査を進めるうち、本県におけるイヌマキ林はかなり分布が広く、施業は類似したものが多いことが明らかになってきた。また、地元でのイヌマキに対する愛着には非常に根強いものがあり、材の用途も多岐にわたっているにかゝらず、第一線の林業技術者の間では全く顧みられず、ろくに知られていないこと、同じ林相状況だったと考えられる近隣諸県では今やイヌマキ林は皆無に近いこと等も判明した。

このような状況からみると、イヌマキ林の実態や、材の利用については林業研究者の間でも重視されていないのが実状ではないかと思われる。

そこで長崎県地方におけるイヌマキ林の実態を、材の利用を中心として報告することとした。

2. イヌマキ林の分布

長崎県においてはスギ・ヒノキを造林する際境界木としてイヌマキを植えた例が各地にある。またイヌマキ稚樹を保護する慣習があるので厳密な意味での天然分布域は求めにくい。図-1はこれまでに存在を確認した林分のうち、明らかに植栽されたものを除いたイヌマキの分布状況である。なおイヌマキ林分はこれまで記述されたとおり^{1,2,3,4,5,6,7)}多種類の広葉樹、特に照葉樹と混交することが多く、純林は稀である。

3. 利用の実態

イヌマキ材は軽軟緻密、淡紅色で美しく、耐蟻性や腐朽耐湿性に富み、建築材、家具・器具材として第一級とされている。材利用の実態を知るために、平戸市、東彼杵郡波佐見町、川棚町、東彼杵町、大村市、南高

来郡千々石町、福江市の民家合計13戸を訪問して使用状況を調査した。

使用場所のうち、最も一般的なのは床柱であり、次いで玄関上り框、床框、階段の踏み板、縁甲板、角柱、床の間・書院等に汎用されている。装飾的な使用方法も各所にみられ、和風建築には適用範囲が広い。五島岐宿町にはマキ材をタンスに加工した例がある。これらは材の美しさを生かした使用方法といえよう。

一方でたるき、縁桁、根太、大引、土台、風呂場や台所の板張り等にも好んで使われる。これらは材の耐湿、耐朽性を賞用したものであり、何れも伝統的な使用方法である。

使用者が共通して挙げるイヌマキ材の長所としては、

1. 材が美しい
2. 死節がなく節はあっても目立たない
3. シロアリに強い
4. 耐湿性・耐朽性が強い
5. 狂いが来ない

等がある。3については、抽出成分に2種類のダイテルペンが含まれているため、防虫能力が高いという記載⁸⁾がある。



図-1 長崎県におけるイヌマキ林

一方、欠点としては

1. やゝ脆く、折れく(或は欠け)易い面がある
2. 材質がやゝ硬く、切削等加工に手間がかかる
3. 水で濡れた場合、すぐに手当てができないと、黒ずんでシミになってしまう
4. 直射日光があたると頑固な歪みが生ずるので、スギ・ヒノキに比べると扱い難い面がある。

等がある。

材は木材市場には出て来ず、流通の実態は非常に把みにくい。森林所有者計15人の話を総合すると、大工や個人が伝え聞いて買いに来る場合が多い。また、産地付近での「家作はマキで…」という希求心理は極めて根強く、親類縁者の新築のために譲り渡すケースもみられる。需要の大半はこのように直接賄われているようである。そのほか、県北部にはイヌマキを床柱に加工する業者が数人ある。その中で大手と目されるA氏(佐賀県嬉野町)とB氏(長崎県東彼杵町)について聞きとり調査を実施した。その結果によると、床柱・ポーチ柱合わせて年間300本(A氏)、床柱80本(B氏)程度を生産販売している。

価格は変動巾が大きい、胸高径25cm級で1本あたり3~10万円程度(立木価格)で取引される例が多い。

緑化木としての利用も目につき、1本100万円で買われる木も稀にはある。一時さかんに山取りが行われたので、平戸市では風致上の配慮から山掘り出荷禁止の条例を制定している。しかし山主にとっては緑化木は魅力的な処分法であろう。

4. イヌマキ林の生育状況

イヌマキの生長が遅いことはほぼ定説となっているが、県内外の既往の調査例と若干の測定結果を用いて図-2を作成した。これから平均的な生長を読みとるのは容易でないが、40年生時で8m前後というのはそう大きな狂いはない値であろう。これを長崎県におけるヒノキの一般的な生長ぶり、40年生時樹高12m前後と比較してみると、やはりイヌマキの生長はかなり遅いといえる。

5. 系統の違いによる形質差

イヌマキに関する記述は非常に少ないが、枝の太い暴れ木的な系統と、枝は細く樹形も通直な系統がありそうだと、との観察⁹⁾がある。枝分けし易いものがあるとの報告もあり⁷⁾、筆者の観察結果とも一致する。更に木肌がつるりと平滑なものと、凹凸の極めて著しいものがあり、床柱としては凹凸のある方が好ましいので、木刀などで樹幹に傷をつけるようなことも行なわれている(長崎県大村市武留路)。生長や、立地に

対する適応性にも差のあることは当然考えられる。そのほかラカンマキとの雑種が多く、これは細葉で生長は遅いとされている⁹⁾。一部では造林への意欲もみられるが、養苗に際してはこうした遺伝的性質にも配慮を要する。沖縄県では数十本のイヌマキ精英樹が選抜され、採種園が造成されつゝあるが、今後は漸次こうした方向に進むことになろう。

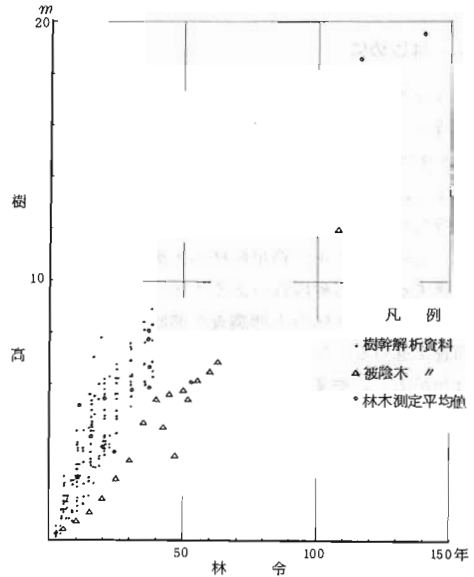


図-2 イヌマキの樹高経年生長

引用文献

- (1)林彌栄：林試報 55, 35~48, 1952
- (2)Ken-Ichi YATOH：三重大農学術報 24, 193~200, 1961
- (3)山中二男：高知大研報 17, 95~109, 1965
- (4)新里孝和：琉球大農学報 21, 655~666, 1974
- (5)新納義馬：琉球大文理紀要, 71~88, 1964
- (6)若林純彦：研修, 24(3), 137~139. 熊本局, 1939
- (7)小池益夫：研修, 22(10), 228~240. 熊本局, 1937
- (8)近藤民雄：林業百科辞典, 日林協, 940. 東京, 1971
- (9)研修, 24(3) 31~34. 熊本局, 1939